

「黄柳野高校支援・共育シンポジウム」開催

下村 正人（東京都／黄柳野学園支援・中小企業家の会代表）

黄柳野学園支援・中小企業家の会は、多くの市民に現在の教育の問題点や対応策、“人が育つ条件”を考えて頂き、加えて黄柳野高校のめざすものの理解を深めて頂くと共に、改めて新しい教育実践に挑む黄柳野高校支援の輪を、さらに広げる場にしたいと願い、1月30日都市センターホール（東京・千代田区）で「つげ野高校支援・共育シンポジウム」を開催した。

パネリストの広木克行長崎総合科学大学教授は「教育とは本来大変手間のかかること、しかし最近の教育は促成栽培的になり過ぎている。手順や経過を学ばず結果だけを教える有り方は、若者に何をしようとしてもどうしていいのかわからなく、結果として無気力で無力感にさいなまれた若者を生んでいる。夢が人を育て、達成感が自信に繋がり人を変えていく。ダメなものは一人もいない。親や教育する側の人間がそれを認め、出来るまで待てるのが大事。先日、黄柳野高校に行ったが、あそこは“人間を取り戻す”という教育の実験に挑んでいると感じた。」大久保尚孝中小企業家同友会全国協議会社員教育委員長は「『社員教育』というと『会社の為に働く人間づくり』のように狭く捕らえがち。私達は企業内に限らず、人と人との関係がすべて“共育”的關係であることを同友会運動の中から学んだ。激動の時代を共に人間として豊かに生き合っていく関係こそ大切で、労使が共に育ち合える土壌づくりが大事。黄柳野のめざすものは素晴らしい。企業の支援には当然限界があるが、出来る限りの応援をすると共に、今後の黄柳野の実践の成果を見守りたい。」羽仁協子黄柳野学園理事長は「人間性の回復ということから考えると、ルソーに源を發して『子どもの教育を受ける権利、労働教育の重視、学問芸術による人間回復』がいられている。またイギリス

のニールが全寮制の学校をつくり『学ぶ意志のあるものが学び、前歴は問わない。すべての問題は全員協議によって決める。学校運営は徹底した民主主義による。』黄柳野も正にこの通り。多くの方々の力添えを頂き、素晴らしい学校づくりが進んでいる。なお一層のご支援を頂きたい。」とそれぞれ話された。

さらに、当日は松崎優子さん、辻野友子さんの黄柳野高校生徒二人からも体験報告があり、黄柳野に来る以前の話、黄柳野での体験の話がなされた。とりわけ黄柳野は、自分達自身が主人公として学校づくりをしていかなければならないという思いが、強く感じられ印象深いものであった。

ところで、中小企業家がなぜ黄柳野高校を支援するのかとの質問をよく受ける。

不登校やいじめは相変わらず無くならず、我々中小企業家としても、将来の生産現場を託す若者の成長に、大きな影響をもたらす教育の問題は、大いに関心がある。しかし元を正せば、偏った偏差値・順位重視や管理強化の教育は、企業が求めて来た人間像、社員像がもたらした結果とも言えるもので、企業家の責任はけっして小さくない。これからの日本の企業は、大量生産・大量販売の売上至上型のナンバーワン主義でなく、個性豊かな特色あるオンリーワン主義が求められる時代であり、中小企業が見直される時代でもある。個人においても一部教科の単なる学力における偏差値や順位ではなく、一人一人の個性的能力を育てる教育が重視されなければならない時代となる。これが中小企業家である我々が、黄柳野支援に立ち上がった理由である。

今、黄柳野高校には240名の生徒が学んでいる。我々は学校を作っておいて、生徒を抱えておいて、頓挫させるわけには行かないのである。